



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

主の公現B年(2021年1月3日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書60章1-6節

第二朗読：エフェソの信徒への手紙 3章2-3、5-6節

福音朗読：マタイによる福音書2章1-12節

## 今日のテーマ：光ひかりとことば

三つの朗読から

第一朗読では次の三つのことば、「輝く」(2節)、「光」(3節)、「来る」(4節)に注目してください。輝く光は神の栄光の表れです。同時に、人はその光のもとへと吸い寄せられていくのです。

「輝く」がある冒頭はシオンへの命令で、もともとシオンが神の栄光を持っていたことを教えてくれます。「来る」から、光に引きよせられるように人々は集うことが分かります。「光」とは、主イエス・キリストを表します。光のもとへと集い、光の子とさせていただくのです。

第二朗読の「秘められた計画が啓示によってわたしに知らされました」(3節)から、神が、秘密を明らかにしてくださる方、そんな神であることがわかります。こうして、異邦人が同じ体に属する者、同じ約束に与る者となるのです(6節参照)

福音朗読にある「拝みに来たのです」(2節)は、神を求める人が抱く、最初の想いではないでしょうか？ 12節にある「夢」も大切なことばになるでしょう。

『マタイによる福音書』が伝えるイエスの誕生物語では、「夢」の果たす役割は大きいのです。天使がヨゼフに語りかけるのも夢の中でした(1章20節)。エジプトへ逃げるとヨゼフに語りかけられるのも夢の中でした(2章13節)、さらにエジプト帰還も同様です(2章19節)。星に頼った、つまり自分たちの経験や知識に頼った占星術の学者たちは、今度は神のことばに信頼をおきます。そして、幼子イエスに出会って、次には夢の中で語られた神のことばに信頼をおくようになります。ここに占星術の学者たちのこころの変化を読み取れないでしょうか。

## ひとこと

占星術の学者たちにとって、星は身近なものでした。星を通していろいろなことを知り、未来を占っていたからです。同時に、星は自分たちを超えた何者かがあることを暗示していました。なぜなら、星を運行する、司るものが存在しなければ、星の意味を知り得ないからです。東方の国で星を眺めている学者たちは、知らず知らずのうちに神への憧れを深めていったのではないのでしょうか。

その星が、彼らを導きます。もう戻ることのないかもしれない旅へと出かけるのです。それは星の瞬き、小さな光へと魅されて、引きよせられていったからです。

彼らは星を見失います。自分たちの判断基準、価値観、世界観を見失ったとき、彼らの前に現れたのは「神のことば」でした。彼らはことばを頼りに出かけていきます。

星に新たな意味が加わりました。ことばを頼りにして生きていく人間の指標となったのです。そして幼子イエスを礼拝します。もはや彼らは、ことばだけに頼り生きていく人間へと変えられていきました。

